

南印度の旅

前田 聽 瑞

一 炎塵熱砂

初秋の或る朝、南印度のマズラ (Madura) の東南ラーメスワラム (Rameswaram) の邊涯。

自然の物象はすべて今印度にゐることを思はしめる。椰子の葉や水牛の動きにも、灼々たる烈陽にも、炎塵熱砂にも否な熱氣の觸感にすらも南印度は沁々感じられる。この自然の中にあつて半裸體の女が牛糞を集めてゐる。四體悶々懶い光景である。おもへばこの界限はラーマ (Rama) 王子が捕はれのいとしき妻シーター (Sita) を奪回すべく、堂々たる猿軍と共にランカー (Lanka) 島——セイロン島——へ押し渡らんとした縁のあこだ。セイロン島に一跨ぎいふこの地點にラーマ王を祀るラーメスワラ殿堂が建てられてゐるが、それは歌心を起さしめるに充分であつた。それにしても阿育王時代に摩晒陀 (Malinda) 王子と僧伽蜜多 (Sanghamitta) 王女とが遠くセイロン傳道の旅枕、月夜マンゴー樹下に光融佛法の祈りをさへけたのも亦この赤土の野でもあつたらうか。

今汽車は北緯八度のところを走つてゐる。こゝは八度だけのこゝはある。車内の煽風器は熱波をあふるだけである。手洗ひ水はまるで熱湯である。午後になつて少し山も見え出した。ブラットフォームには猿が押寄せてゐる。私のバナ、は猿の御供養に役立つた。

印度では猿は猿神ハヌマーン (Hanuman) の權化として一般から敬意を以て愛撫されてゐる關係上、猿が人間に慣染

んでゐるのはこの國では別に不思議でも何でもない。

二 マズラの半日

その日の午後三時すぎ、マズラ (Madura) 驛に着いた。プラットフォームの混雑、押し合ひ壓し合ふ喧噪の渦巻。この渦中には金銀寶玉の瓔珞で着飾つた貴族、富豪の婦人たちも混つてゐる。そのいづれもが皆素足である。しかも、その素足には高價な煌びやかな踝輪がはまつてゐる。印度の婦人は歩く毎に寶玉が頬に觸れて搖れる音を喜び、踝の上で鳴る飾環の魅力に心を惹かれるのである。こんな騒がしいプラットフォームでは素足美の魅惑に酔つてゐる餘裕はないが、それでも歴史的の深い懷想に墮るこゝが出来た。

こゝマズラは純印度教風の都會で、人口は十四萬もあるといふ。しかし、マズラは生きた過去である。嘗ては「南印度のアテネ」まで稱せられた輝かしい歴史的な都であつたが、今は南印度鐵道の一主要驛たるに過ぎない。それも、全く驛から約半マイルのところにある著名な巡禮所、マズラ大寺があるがためで、この大寺がこの都の心臓なのである。

マズラの驛に降り立つて、まづ第一になすべき私の仕事は、宿屋を取り決めることである。もごよりホテルはない。

豫て「案内記」で承知してゐたスペンサー會社 (Spencer & Co. Limited) の文字がふくみにごまつたので、早速驛の二階へ登つて行つた。二階は會社經營の貸間である。貸間は四室である。私は中央の西の室をあてがはれた。左右の二室は既に印度人が占領してゐる。部屋は薄暗く汚い。敷瓦の床で、眞中に寢臺が二つ、隅にテーブルと椅子が置いてある。寢臺には蚊帳が釣られてゐる。それから天井を横斷して一枚の席が吊るしてある。席には紐が附いて壁の穴から外側へ抜けてゐる。即ち燭風器の代用である。ルーピー (Rupee) も支拂へば一晚中奴隸がその紐を引き動かせて、風を起し

てくれる。電燈は點かない。ランプである。

四室共有の露臺からは、幾世紀かの星霜にもめけずに立つてゐるマズラの大寺が見える。何といふ壯觀さだ。地にひれ伏す「寺院の町」マズラに、巍然として聳ゆるこの大寺。この大寺が持つ九個の奇異なる塔影は、ありにし權威ある印度敎文化を物語るが如く思はれる。暫し私はこの印度敎文化の輝きに心を奪はれて、遠く故國を何千里、椰子の實薫る南印の空にゐることを、全く知らずにゐた。

露臺は驛前の通りに面してゐる。通りは雑沓してゐる。烈陽矢を向くる街上を、例の跣足無帽、腰布一片の土人が平然と潤歩してゐる。バンヤンの樹下には三々五々陣をなして涼を取つてゐる。牛車が唯一の交通機關である。スケッチをする心得のない私はこの情景をカメラに収めて置いた。

物質、マズラ案内人なき、いづれも錢欲しさうに訪れて来る。旅の通りすがりで一向相場が解らぬが、眼の前に並べられた品々は是が非でも買つて置きたい青銅製の印度敎の神像と繪はがきの類である。こも角値段をつけて神像大小五體を買つた。これからの旅路にはとても重荷ではあるが、それでも私の願望は飽滿する程に充たされた。

三 見學——ミナクシ大祠堂

日は漸く落ちて、微風吹動、マズラの町も段々燈火を點じかけた。印度敎の現實に觸れるには、日沒時を選ぶに限る。

いよく好意ある運命が、私を輕快な牛車にのせて夜のマズラの町を案内させてくれるのである。印度美術の權威クーマラスワミ(Coomaraswamy)氏も言つてゐるやうに、「彼等の本山のある都市は、寺院のために存在してゐて、都市のために寺院があるのではない」。街頭には大きな圖體をした牝牛が悠々寢そべつてゐる。印度では大變牛を尊ぶ。濕

婆 (Siva) の神としてまで牛を貴ぶのである。殊に牝牛を非常に尊び、彼等印度人の間には牝牛と共に起き、牝牛と共に寝る者すら現存してゐる。

洵に牝牛こそは聖獸の最たるもので、その身體の各部分は例外なく神の片影を宿してゐるに信ぜられてゐる。現にヒンズーの人達は年毎に牝牛の祭を営んでゐるが、中には毎日牝牛を敬禮する篤信家もある。牝牛それ自體が既に神であるから、その崇拜には特別の偶像を要しない。牝牛の小屋で、その水桶の前で禮拜をするのであるが、その儀式は神前のそれと何等違つたところはない。斯く牛が神視される關係上、彼等は牛糞までも神聖視して、物を淨める際には必ず之を用ひる。

『論』^{シャストラ}には神像は牝牛の五物を以て洗淨すべき旨を載せてゐる。五物とは牛乳、凝乳、牛酪、牛糞及び牛尿である。今日でも、印度教徒は毎朝戸口を牝牛の糞で拂拭し、それから初めて戸外に出づる掟である。食器——食器はすべて眞鍮器で決して陶器を用ひない——も亦牛糞で洗はれる。牛糞は又印度に於ける唯一の燃料で、立派に商品として賣買されてゐる。惟ふに印度に於ける牛神聖説の起源は實に古い。牛は印度に於ては人間のこの上もなき好伴侶であつた。牛は豊かな供給者であつた。彼はミルクを與へるばかりでなく、耕作を可能ならしめた。洵に牛は印度人の「母」であり、「殺すべからざるもの」(Aśmīya)であり、又財産でもあつた。

『アタルバ吠陀』に於て牛、牝牛を以て宇宙の大原理(神)としたのもこの傾向の極端に進んだ結果である。「印度教印度」に於ける牛の神聖説は又實にこゝに淵源する。しかし、牝牛崇拜が印度人の生活に深く喰ひ入つて動かすことの出来ない信仰となつたのは割合に近い話で、恐らくマヌ法典 (Mānava-dharma-sāstra) の完成した前後であらう。蓋し、印度教の説いてゐる牛の崇拜には、慈心不殺、動物愛護の雄大なる精神が潜んでゐる。牛はたゞ總ての動物の代表である。牛の崇拜、牛の保護は口の利けないすべての動物の崇敬、保護を意味する。造化の下層にある動物の哀訴は、口が利け

ないだけに一層痛切である。洵に牛の崇敬、保護は全世界に與へる印度教のよき贈物である。

馭者が車を急がせるので、入念に見ることは出来ないが、殆んど戸毎に神々の畫像が貼られ、好運の女神ラクシュミ（Laksmi）には燈明が上げられ、街の隅々で幸運利福の神ガネーシャ（Ganesa）が香華燈火の供養を受けてゐるのも流石は「印度教の町」であると思つた。

間もなく、私の車は名にし負ふマズラ大寺の門前に出た。門前の賑ひ、混雜は全く期待以上であつた。書物の上での智識を、私は今や活き／＼見るのだ。私の記憶してゐる挿繪の數々を、私は今や實物に於て見るのだ。もしも私が善い伴侶と一緒に、よく物の解つた人に案内されて、この大寺を見學したら、それこそ私は果報を通り越したであらう。

マズラの大寺は南印度では最大なるものゝ一つである。大寺の外廊は八百四十七フィートと七百二十九フィートとの平行四邊形である。九個の塔で圍まれてゐる。所謂ゴブラ（Gopura）とは元來塔型の門、又は嚴飾された樓門の意である。最大の高さは百五十二フィートの通天閣である。その外壁は初層より最上層まで完膚なく彫刻を以て充塞されてゐる。彫刻の材題は勿論印度教の神像、神話の類であるが、一々之を考査することは旅人でなくても恐らく無謀であらう。一々之を知り抜いて、改めて全體の姿を眼で見れば、確かに新しい生活が始まるに相違ない。これは單に建築物と謂はんよりは寧ろ超凡彪大な宗教的彫刻物と云つた方が適切であるかも知れぬ。建築年代は第十七世紀の初頭に屬しナヤク（Nayak）王の建つるものであると云はれてゐる。

大寺には二つの主要なる大祠堂がある。一つは濕婆（Śiva）神——こゝではサンダレスワル（Sundareswar）と呼ば——のために、他は濕婆神の妻ミナクシ（Minakshi）のために建つるもので、魚眼の女神である。息子のガネーシャ神も別に小祠堂で祭られてゐる。象面、長腹、長耳、一牙、騎鼠、双身の怪奇な福の神である。

何と云つても此處は印度教の本山だけのことはある。賽者は門前に市をなしてゐる。さうせ、印度教徒だからその前

額部には例の宗標(Pundra)を描いてゐる。縦或は横に白か赤か黄かで三線印を彩つてゐる。しかし濕婆教徒(Saiva)の毘紐笈教徒(Vaishava)とは無論その宗標は違ふ。前者は通常白色で横に三線を描き、後者は紅、黄、白の三色で縦に三線を描いてゐる。若い女がその肩間の上に濕婆神の第三眼を紅か黄かで點彩してゐるところは正に閉月羞花の容姿である。お寺の内外はかうした宗標で化粧した滿額飾の老若男女で大變な賑ひである。無飾の私の額には異教徒として暗愁が宿つてゐるかも知れない。

門内の兩側には夜店が並んでゐた。私は夜店で土産や参考品を買ふことを怠らなかつた。が、案内人にせき立てらるゝ儘に、參拜見學の眼をみはりつゝ歩き廻つた。その怪奇豪壯な景相は見る者をして壓倒せずには措かない。内部の壁にこいふ壁、柱にこいふ柱は神像、人獸、牛、馬、象、蛇、陰陽物等々の無數の彫刻で埋まつてゐる。全く素晴らしいインド彫刻の寶庫である。足の向くところには神があり、動物があり、庶物がある。まことに「法界彩を發して海會の影森羅たり、四大暉りを交へて塵刹の像駢填たり」だ。私は仰ぎ見て愛溺をこの涯に忘れ、たゞ驚いてゐるばかりであつた。モニエル・ウキリアムズ(Monier-Williams)氏の靈筆になる『印度教』(Hinduism)には、印度教の全貌を手際よくスケッチしたと思はれる一節がある。

印度教は吠陀(Veda)から出發し、然もあらゆる宗教から何物かを採擷し、以てあらゆる人間に適合する形式を現はすに終つてゐる。印度教は眞に寛容的であり、順應的であり、包括的であり、又吸收的である。又印度教は精神的、物質的、顯教的、密教的、主觀的、客觀的、合理的、非合理的それから純的、不純的といったやうなあらゆる局面を持つてゐる。印度教は巨大な多角形或は不規則な多邊形に譬へるこが出来る。一邊は實際的であり、他邊は純道德的であり、更に敬虔的な一邊、空想的な一邊があり、或は感覺的、肉感的な一邊があり、或は又哲學的、思索的な一邊がある。儀式的奉仕に甘んじ得るの徒は印度教を以てこれ足れりとしてゐる。行業の効果を否定して、唯信仰に生き

ようとする者も印度教の埒外に迷ふには及ばない。肉感的對象に耽る者も亦その趣味を満足させることが出来る。そして神々人の本性、物質と精神との關係、萬有の神秘、さては惡の起源に就て冥想するを悦ぶ者も亦それ等の思索に没頭することが出来る。殆んど無限の擴大をも抱擁する印度教の受容力は如何なる特殊宗教の信者をも包容して毫も洩すところがない。

このモニエル・ウキリアムズのスケッチを、私は今活々見てゐるのだ。寔にマズラの大伽藍は正に彫刻による宗教の百科全書である。今この大伽藍の内部は燃えさかる幾百の油燈で照耀されて、怪奇な彫刻は一倍グロテスクな色を見せ、そこに群がる左往右來の信者の動き、その惡臭、その喧噪、まるで「魔の宮殿」を思はせる非常情景である。間もなく私は千柱殿の前に來た。怪馬その他を彫刻する九百八十有餘本を算する巨柱の大殿である。そこには多くの裸體が跌坐してゐる。經文を誦してゐる。兩手を舉げて祈つてゐる。

案内者に急ぎ立てられるまゝに、「明日もう一度見直さう」と考へながら、案内者について廊道から廊道を見て歩いたが、到る所に、象面神のガネシャが香華の供養を受けてゐる。或る者はガネシャの像に牛灰を灌ぎ、その灰で額に三線印を描き、或る者は牝牛の像に同じく牛灰を灌いで祈願をこらしてゐる。導かるまゝに、今度は大きな聖池ポッタマリイ(Potamarai)に出た。池邊には行者が胡坐してゐる。池の中には多く裸體が沐浴してゐる。

印度教寺院の主要部は拜殿ガルバ(Garbha)とてあつて、前者は建築の前面に附屬し、柱のあるこゝもあり、又ないこゝもある。こゝはすべての信者に開放せられてあるが、後者は拜殿の後部に位し、暗黒で、その中に神像を祭り、勤行する僧侶しか入れない。けれども時としては繞道ダルシヤンが設けられてあつて信者の入れるこゝもある。印度教の拜殿は本來は繞道と信者のための場所で、人々はそこへ神を「見る」(Darsan)ために來るのである。

しかも今私は幾百かの油燈がゆらめく千燈扉——神秘の龕内に鎮坐する濕婆神の愛人ミナクシ女神の實前に立つたの

である。突如、私は後ろから花環を首にかけられて、御賽錢以上の御賽錢を強請された。實前は賽者で一杯であつた。私も思ひあふれて無言の跪拜をなした。信者が口々に洩らす祈禱や讀經の幽韻な騒々しい交響樂、薄氣味の悪い陰暗な鈍い光。あたりに蟠り、漂ひ流れる異様な匂ひのする空氣。あたりは一面に濛々たる混亂の渦卷であつた。

印度に於ける回々教徒と印度教徒との對立抗爭の歴史は古い。しかもその多くは牛からの喧嘩である。前にも云つたやうに、印度教の中心事實は「牛の保護」である。しかし回々教は或る宗教的祭禮には宗教上の義務として間々牝牛を犠牲に供へる。そしてこの事は文盲な印度教徒を殆ど我慢しきれぬまでに激昂させる。回々教の信者たちが犠牲の牝牛の頸に犠牲の花環を巻きつけて、それを虐殺する目的で、町の大通りを引いて歩く時、かゝる時敬虔な印度教の大衆は憤怒する。かくして直ちに暴動が起り血が流されるのである。従つて、印度教の寺内を靴穿きで歩くことは、印度教徒を怒らしめることとなる。ふむ、この事に氣づいた時、私は慄然肌粟を生じた。早速靴をぬぎ捨て、人の脂で黒光りしてゐる疊石の廊道を靴下のまゝで歩いた厭はしさは、今に忘れられぬ思ひ出である。

宿に歸つた頃は、月は満天に牙を渡つてゐた。仕事で済んで孤りほつちになるが、旅の空は流星に淋しい。薄暗いランプの下で一人旅の心細さにやゝ氣を腐らせる。日記を書くのも物懶い。手にしたペンをすてゝ、露臺の藤椅子に凭り乍ら、寂しい旅の心をしみじみ感じる。金風吹動、月光清澄。マズラの大寺は明るい光を浴びてゐる。「月やは物を思はする。」上杉不識庵が「霜は軍營に満ちて秋氣清し、數行の過雁月三更、越山併せ得たり能州の景、遮莫れ家郷遠征を憶ふを。」の名吟も、今更のやうに思ひ出される。

止むを得ないので、旅愁を遣うために、驛の食堂にはいつて休まして貰ふ。上衣は白の詰襟で下は例の無縫衣ドーテイ(Dhoti)——白木綿の腰巻一枚といふ南印のボーイさん、言葉をかけても英語は通じない。眞逆ビール一杯ではと思つて欲しくもないライスカレーを手眞似で注文して、無言で杯をあける。それは全く孤りほつちの旅愁である。故國の言

葉は言ふまでもなく自分の耳からも口からも全く消え去つてゐる。今は全く口の利^きけぬ犬、猫同様である。英語すら能く通じない。旅愁、郷愁^{ノスタルジー}は倍加するばかりであつた。

食堂を引き上げて、女將に風呂を頼む。これも今は疲勞をやすめるこいふよりも、寧ろ何^{なん}かして旅愁から逃避せようとする善巧方便だこいふ妙な心持であつた。湯殿は洋式だが水風呂である。水風呂に浸つてゐるこ、恐ろしい程感傷的になつて来る。水風呂を出てから、ウキスキーで元氣をつけながら、孤燈の下、その日の日記を書きかけた。寂寥は全身心に一しほ沁みわたる。十一時ごろ、ベッドにもぐり込んだが、容易に寝つかれない。蚊帳の中で微かな燈影をまじく見やり乍ら、若しもこゝで病氣にでもなつたらばなご、我から怖ろしい空想を創り出すのであつた。が、終日の見學で綿の如くなつてゐる肉體は、いつこはなく淡い夢路を辿つてゐた。

四 見學——水浴を語る

あくる朝は快晴であつた。全く「見學日和」の空であつた。朝陽に浮ぶマズラ大寺の威容、町を壓する寺塔の偉觀、私はこの大景觀をよく心に記しつけた。朝になつて、昨夜の郷愁を反省してみるこ、馬鹿らしくなるばかりであつた。クーマラスワミ(Coonaraswamy)氏がその著「印度及びセイロンの美術・工藝」(The arts and crafts of India and Ceylon)に於て、彫刻に就て論ずる際に、大膽に言ひ切つてゐるこは今の私に對しては無上の贈りものである。即ち彼はかういふ意味のこを述べてゐる。——「極めて眼界の廣い人、殊に親しく印度を踏破し又は印度にその生涯の大部分を送つた者が、印度人の生活と藝術とを理解するこに努めないならば、それは餘程無感覺な人間であるこを自證するものである。」實際、私はこの幸福な印度の旅を充分に享樂し充分に活かさねばならぬ。

私は午前九時ごろには、再びマズラ大寺の境内を愉快な氣分で歩いてゐた。ジョン・マレーの赤い「案内記」を手に

した一見英國人らしい二人の男が聲高に話しながら近寄つて來た。再び逢ふ機會もあるまい其二人の男は手を握り合つた。

マズラ大寺は二度來てもやはり驚異の對象である。埃及のピラミッドを見た眼にもやはり驚異は驚異である。松本博士の『印度雜事』には「南印の建築は其形方錐形を爲し、十層乃至十四五層に至り、方錐の上部は宛も寶冠を戴したるが如くに相似たり。多くは花崗石を以て之を疊み、最下層は一大堂を形成し、其の大なるものに至りては千個の石柱ありて之を支ふ。而して各柱及び各層の外部は又多少の彫刻によりて裝飾せらる。是故に遠きよりして之を望む時は洵に壯大雄渾の觀を呈すといへども、亦甚だ重苦しきの感なきにあらず。而して其の建築は更に統一するところを得ず。唯一々の點に就きて、仔細に之を觀察し來れば、實に吾人が贊嘆に價なしとせず。（中略）吾人は唯其の大に驚くのみならず又其の無限の勞に感ぜずんばあらざるなり。」云つてある。無論これは南印の建築一般の素描であるが、マズラ大寺の建築もこれに依つて判斷しても決して過誤はない。蓋しかゝる大仕事、かゝる大殿堂は宗教と藝術と生活と相亂れ相合して初めて成就されるものだ、私には思へるのだ。あゝ「印度教印度」^{ヒンズー・インド}、私は卿に心から跪拜する。

私は今や再び境内から廊道、廊道から祠堂、聖池へ見學を始めてゐる。池には一見オールドミスらしい三人の女が沐浴してゐた。いやな光景ではない。池の名はポッタマリイ (Potamarai)、英人は「金蓮池」(Tank of the Golden Lilies) と譯してゐる。周圍には拱廊がある。私は池邊に佇んで無言のまゝその水浴の情景を見學した。水浴と云つても衣類を纏ふた儘である。裸體は斷然見せない。頭から布を冠つた儘で水浴してゐる。衣類ぐるめ水浴しても常夏の印度では直ぐ乾き切つて仕舞ふ。何といふ安晏、何といふ簡易。

凡そ如何なる民族でも水そのものに拂淨力を認めた。わが國にも祓^{ハヒ}(禊)の行事があり、アラビヤの地にも神殿の傍には常に水浴場の設けがあつた。こゝ印度に於ても亦身心の淨化には水浴第一といふ傳說的信仰がある。身心に垢穢なく

内外を清淨にするこゝは印度に於ける宗教的並に社會的教育の根本義である。特に清淨を以て宗教上の最大事と心得てゐる婆羅門(Brahman)の如きは少くとも一日に一回は必ず水浴する。戒律堅固なものになるこゝ、一日に三回も水浴するのが例である。又印度では首陀羅(sūdra)族即ち奴隸族以外の再生族一般——婆羅門族・王族並に吠舍(Vaiśya)族のもの、一生の間に學生期・戸主期・林棲期・托鉢期の四時期を送らねばならぬとされてゐる。林棲期の行者は不斷の水浴が大切な務(Vrat)である。托鉢期の行者は毎朝必ず水に浴した後、その身に牛灰を塗らねばならぬ。水浴を數多く行ふこゝがこの托鉢期の行者に課せられた大切な務めである關係上、彼等は概ね浴池若くは河流の近くに草庵を結んでゐる。こゝも角印度では六根清淨のために水浴が重んぜられたが、特に恒河・ジウムナー(Jumna)・インダス(Indus)・ゴダーブリー(Godāvarī)・ネルブダ(Nerbuddha)・カウヰリ(Cauvery)等の如き聖河に浴する時は過去一切の罪垢が消除せられると信ぜられた。就中、恒河は自在天濕婆神の足下より流れ出づる聖河として最も神聖視された。従つてこの河畔に聖都並に沐浴場(Tirtha)の出来るのは蓋し當然の事で、かくてベナレス市は濕婆神の一大廟所として、全市並にその界限は神聖不可犯視され、その名聲は十方に響いた。即ち「ブラーナ・アグニ・ホトラ・ウバニシャット」(Prāṇāgnihotra-Upaniṣad) 第四章には

婉羅捺城(Vārāṇasī)——今日のベナレス——にて死せるもの、或はこの聖典を誦せむもの、かゝる人はこの一生に於て解脱を獲得すべし。實にこの一生に於て解脱を獲得すべし。これを奧義とす。

と、説かれ、『西域記』卷第四には

觥伽河(Gaṅgā)、河源の廣さ三四里、東南海に流入する處は廣さ十餘里。水色滄浪波濤浩汗、靈怪多しと雖も物のために害せず。其味は甘美にして細沙は流に隨ふ。彼の俗書に記して之を福水と謂ふ。罪咎積るに雖も沐浴すれば便ち除く。命を輕じ自ら沈むも天に生じて福を受く。死して骸を投ずるも惡趣に墮ちず。

ミ云つてあるが、印度人は今も尙ベナレスの神聖ミ恒河の無上功德を堅く信じ、年々歳々水浴の目的でこの聖地に殺到するヒンヅー行者の大景觀は寧ろ想像を許さぬ程である。けれども、假令平凡な浴池であつても聖河に水浴してゐるミ憶想する時は聖水に浸つたミ同一の功德が生ずるミされてゐる。

斯く水浴は單に肉身の不淨を拂淨するのみならず、あらゆる罪垢は蛇がその皮を脱ぐが如く悉く解消されるミいふのが、抜くべからざる印度人の信念である。それにしても、不潔極まる汚水に浴して、しかも「身心無垢内外清淨」を決め込んでゐる彼等を見ては、一種の哀愁を感じずにはゐられない。無論旅の素通りでは、印度人の生活内容は到底見透しがつき兼ねるが、それにしても『通俗印度教』(Popular Hinduism)の筆者マードック(J. Murdoch)氏の報告を見ては全く二の句も出ない。彼氏は云ふ。

ヒンヅーの多くは恒河及びその他の聖河に浴せばすべての罪障は淨拂され得るものミ信じてゐる。それで、假りに物を盗んでも直ぐに恒河に飛び込んで水行沐浴、後は全く知らぬ顔でゐる。捕へて泥棒扱ひにするミ、今恒河で沐浴したから、罪は解消されてゐる筈だミ應酬する。一體この口實がどうして一般に是認し得るか。全然、人を馬鹿にしてゐる。

ヒンヅー商人の多くは毎朝恒河々畔からその店肆に出かけて、顧客に虚言を吐き欺取掠盜をこれ事ミしてゐる。見よ恒河々畔に於けるヒンヅーの水行の盛んなることを。しかもベナレスに於ける水行者は虚言ミ掠奪ミで有名である。生天の希望を空しく抱いて、命終に臨んで恒河に趣向する彼等群萌は洵に憐れである。各々その右手に虚言を持しつゝ死出の旅に就くのである。

罪の觀念が甚だ幼稚、低劣ミでも云ふのか、若しマードック氏の報告に過誤がないミすれば、彼等ヒンヅーの迷妄・朦昧その邪惡ぶりには呆れて物が云へない。これでは印度人の更生も實に前途程遠しミ云はねばならぬ。

大寺の見學は今日で二日目、それでも寺内を歩き廻つてゐるこゝ、始終、何か新しいもの、心をひきつけられるものに出つこわすのである。しかし、昨夜の方は今日の晝間にくらべるこゝ、格別に收獲が多かつた。

ひこり旅の氣輕さで、午後の時間は移つて行く。

五 マドラスを指して

午後三時半の汽車で、私はマドラス(Madras)に立つた。ひこり旅なので、私は過ぎにし幾日かの印象を再び記憶から喚び起し、旅の日記を繰り返してゐるだけの閑が充分ある。それはいかにも樂しみなものだ。しばし、南印の風光を車窓で樂んでゐる間に夕闇が迫る。燈光點々。闇のなかを汽車は轟々こ走つてゆく。夜汽車のさびしさを味つてゐるうちに、晝間の疲れは何時こはなしに自分をうごこさせた。切符改めの車掌が來た時には、青白い曙の光が部屋のなかに動いてゐた。夜明けがたに汽車は靜かにマドラスのエグモア(Egmore)停車場に這入つて行つた。驛は一杯の人であつた。

私は言はゞマドラスへ飛んで來た。印度教學の巡禮者としては是非立ち寄らねばならぬトリチノポリー(Trichinopoly)タンジョール(Tanjore)それからチングレプト(Chingleput)は全然見なかつた。今こなつては一代の恨事であるが、所謂「旅路の憂さは、旅せし人ならでは知るまじ」で、その當時の私は行路の難澁、遊子のさびしさから逃避したい氣持で一杯であつた。マドラスを見たいこいふ欲望よりも歐化したマドラスに早く落ちつきたいこいふ欲望の方が餘程大きかつた。いよいよマドラスへ着いて、私は落ちついた氣持になつた。

六 英人の都、マドラス

マドラス市は、人口實に五十有餘萬、英領印度第三位の都會で、マドラス州の首府としてインド東海岸の海外貿易港

こして、南印度隨一の歐化せる都會である。従つてマドラスは旅行者の眼には純淨な印度の都市といふ氣持は全然起らない。この都の成立も極めて近代で一六三九年、英人ミスター・フランシス・デー(Mr. Francis Day)がこの地に聖ジョージ(St. George)城を築いたのが、抑々この都の創始である。一時、瓜哇に於けるバンタム(Batavia)のイギリス商館に屬したこともあるが、一六五三年には獨立政廳が闢かれてゐる。従つて市街は「英人の都」と云つても然るべき程で、殊に聖マリーズ・チャーチ(St. Mary's church)の如きは英國教會としては全印度中最古のものゝ稱せられてゐる。

マドラスに於て見るべきものは城塞・教會・マドラス州廳・高等法院・港灣及び博物館であらう。マドラスでは氣持もすつかり落つき、旅心も薄らいだので、私は私の日を出來るだけ利用して、あくまで見物しよう思つた。タクシで市をかけ廻つた。城塞や教會堂を見た。しかし、これ等を眞に享樂するには、學的興味を必要とするが、それは私には缺けてゐた。それから、私は博物館を訪づれ、そして夕方までそこにゐた。こゝには佛蹟アマラーヴチー(Amaravati)から運搬された優秀な彫刻的遺物が多數陳列されてゐる。所謂國寶的雄品ぞろひである。研究すべきもの、觀照すべきもの、優美なるもので充實してゐる。無論アマラーヴチー彫刻の遺物は英國の博物館、それから甲谷^{カルカッタ}他の博物館にも散らばつてゐるが、學的研究は別として、一日の觀賞にはこゝだけでも十分である。

このアマラーヴチー・ガレリー(Amaravati Gallery)の外に博物學・植物學・地質學・工藝品等の出陳室があるが、それゝ個性を持つてゐて一日の見學だけではとても不充分である。附屬圖書館には多くの人が熱心に讀書してゐた。

夕方、セントラル(Central)驛構内のホテルに引上げた。このホテルは歐洲の田舎のそれよりも見劣りがするが、それでも落ついた好い氣分を漲らしてゐた。私は氣持もすつかり直り、今は夕食のテーブルに向ひながら、何とも云へない旅のよろこびに浸るこゝが出来た。

七 悚怍言ふべからず

私は快晴な朝にホテルを出た。徒歩で電車で、市街をそこに住む人達の動きを飽くまで見物した。それから古本屋を尋ね廻はつたが、大きな本屋は日曜日で店を閉めてゐた。こゝでも歐化したマドラスを私は見た。

夏目漱石さんはその『倫敦塔』の冒頭に「一度で得た記憶を二返目に打ち壊すのは惜しい、三たび目に拭ひ去るのは尤も残念だ。」「塔」の見物は一度に限る。」と書いてある。それで、私もロンドン滞在中「倫敦塔」の見學はたゞ一回、再び行かなかつたが、今に何の後悔もない。しかし、こゝの博物館の見學はこれには自らその撰を異にする。優美なる美術に對する第一印象の喜びは不完全である。博物館はいゝ機會があれば幾度も行つて見るべき處である。若しそれ東洋美術史の研究者、建築家などは長くこの地に留まつてアマラーヴチー美術の精細なる記録を作る義務がある。またそれほゞ専門的でなくとも、このアマラーヴチー・ガレリーの雄品傑作だけは寫眞に撮つて置くべきである。

私は今やすでにその雄品傑作の觀察を始めてゐる。二度目になるこゝ、最初の喜びは驚嘆となり、驚嘆から共鳴となる。こゝの博物館が、今の私のこの喜び、この驚嘆、この共鳴を永く活々保持しうるやうに、小冊子でもいゝから「博物館目録」を作つてゐてくれたらこゝ、何んなに私は願つたことか！。

午後、マドラス市の地圖を入念に調べてから私は海岸に出た。あたりの眺望は立派な繪である。私は靜かに、いかにも心ゆくばかりの時を過ごした。

「遺跡を洗へる水も入海の、石を思へばなつかしきかな。」こゝは樺尾の明恵上人がかりそめの旅のゆかりに、紀州の濱邊におり立つて、思ひを五天の空に馳せ、磯の小石をかの佛足石に擬して思慕禮拜、以てその感慨を詠へるもの。更に「印度は佛生國也。依戀慕之思難抑。爲遊意計之。哀々マイバラヤ」こゝは上人の『印度行程』の終末に記された言葉であ

る。寔に明惠上人は釋尊思慕の聖者であつた。その釋尊思慕の精神、それが吾々へ喚びかけた意義は實に大きい。生涯釋尊を思慕しながら、その切々たる渡天の願望を果し得ないで、泣きくられた明惠上人の芳躅を、今このマドラスの濱邊に偲び、一は喜び一は悲しみ、深愧深愧悚言ふべからざるものがあつた。

葬式が通る。基督教の葬式である。電影駐りがたし幻化誰か久しからん。けれども異域の空で葬式に出會つた氣持は又格別である。それにつけてもかの伯林大學のリヒャード・ピツシエル (Richard Pischel) 教授が六十の頽齡病弱の體軀を提けて、遠く印度に遊び、不幸このマドラスの病舎に客死した悲壯な傳歴が思ひ出されて轉た心縁の動するものがあった。

マドラスの濱邊の眺め、そのさすらひ、その靜思は生涯忘れることが出来ない云つてもよい位である。

時間も迫つてくるので、夕暮を待たずにホテルに戻つた。熱い匂ひのよい珈琲を唇に當てながら故郷の先輩・友人に繪葉書を書きなごした。

夜が来る。こゝに今一晚泊つて夜のマドラスを味ひたい氣もしたが、やはり午後の八時に出る夜汽車に乗つて甲谷^{カルカッタ}他に立つた。皎々又皎々、明月車窓を照らす。夜も更け、そのうちに晝間の疲れは快い汽車の動搖に伴うて、何時しか私は深い眠りのなかに落ちて行つた。(終)